
『喧嘩百景』第6話「成瀬薰VS緒方竜」

TEATIMEMATE

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『喧嘩百景』 第6話 「成瀬薰VS緒方竜」

【著者名】

Z4966Y

【あらすじ】

看板に偽りのある一作。一応薰ちゃんは出ますが、竜ちゃんとは和やかにお話をするだけ。喧嘩にはなりません。喧嘩らしいことは彩子さんが代わりにやつちやつてます。構成なんてものは考えず、竜ちゃんの好きにやらせたら、こんなにページ数超過になっちゃいました。やれやれ。

成瀬薫 VS 緒方竜

「なあ、あんたと今の会長、ほんまはどうちが『最強』なんや?」
緒方竜は生クリームの浮かんだココアを啜りながら、カウンター
の中でコーヒーを淹れていった。成瀬薫に声を掛けた。

高校を卒業し、大学に通つていてる薫と彩子 内藤彩子は、授業
のない時はよくここ 不知火羅牙の母親の茶店で手伝いをしてい
た。

「何だよ、竜、まだそんなこと言つてんのか」

薫は高校在学中、この喧嘩つ早い後輩に何度も勝負を挑まれたも
のだったが、その度に何やかんやと理由を付けて結局そのまま卒業
したのだった。

「なあ

竜は強請るような目で薫を見上げた。

「一賀に決まってるだろ。あいつがこの辺りじゃ『最強』って呼
ばれてたんだ」

呼び名なんかどうでもええ。

竜は思つた。確かにこの辺りで

「最強」と呼ばれていたのは日栄一賀だった。「最悪」という形容
詞のおまけ付きで。しかし、彼がこっちへ転校してきたとき、その
日栄一賀もすでになりをひそめて一般の学生の中に埋没してしまつ
ていた。 そうさせたんは誰や。竜が疑問を抱くのはそこだつた。
「なあ、あの性悪が何で大人しゅうしとるんや」

一賀が「最悪」と呼ばれたのにはそれなりの理由がある。そんな
奴が何故大人しく「お茶会同好会」なんていう茶飲み友達グループ
の会長なんかに納まつていいのか。

「そりやあ環女史の人徳さ」

薫は笑つた。環女史 現お茶会同好会副会長。

「惚けんなや」

「惚けてなんかないぞ」

「あんた、あん人とやりおうたこともないらしいなあ」

竜は、お茶会同好会に入つてからも近隣校の奴らを締め上げて、解散してしまつた「龍騎兵」^{ドラグーン} 特に最後の総長、成瀬薰とナンバ一2日栄一賀について調べて回つていた。

「ああ、ああいう奴には近付かないに限るからな」「竜は薰に解るよう口を尖らせて眉を顰めて見せた。

「あんた、負けんのがそんなに怖いんか」

「負けるのは一向に構わないさ。結果の判つてる勝負はする必要がないだろ?」

竜は渋い顔のままココアを啜つた。

「勝負なんて、やつてみな判らへんやな」

「判るよ」

竜は成瀬薰のこうこうのらうりうりしたところが氣に入らなかつた。他のメンバーの手前、先輩として立ててはいたが、薰の幼なじみの女たちならともかく、あの日栄一賀までが大人しく彼に従つているのがどうしても解せなかつた。

「あんたほんまに腑抜けやな」

「ああ、腑抜けだよ」

竜がいくら挑発しても薰がそれにのつた例はない。その点では薰の忍耐強さは驚異的だった。

「なあ、何でや?」

竜はカウンターに肘をついて上目遣いに薰を見上げた。

「いいじやないか。一賀に無理させなきや、お前に敵う奴はいないんだ。それでさ」

薰は竜の前にアップルパイの皿を置いて、「ああ 羅牙^{ライガ}と美希ちゃんは別だぞ」と、付け加えた。

「いやー、あんたらを知つとる奴らの誰がそないに思うねん。俺はええ笑い者^{もん}になるだけやないか」

竜は皿を引いて、フォークを銜えた。

彼が甘党なのを知っている薫は、いつも頼まれもしないうちからケーキを出してやつっていた。

「そんなことないって。俺は臆病者で通ってるんだから」

「薫は自分で淹れたコーヒーを注いで口に運んだ。

「その臆病者が龍騎兵を壊滅に追い込んだんか？」

「人聞きの悪いこと言つなよ。龍騎兵は解散したんだ」

竜は膨れつ面でアップルパイにかじりついた。

一高龍騎兵には総長の代替わりの時に、次期総長候補者を卒業生が私刑にかけるという伝統があった。噂では、それまで大して目立つた存在ではなかつた成瀬薫が次期総長に指名されて、私刑にかけられた際、先輩を全員叩きのめしだけではなく、当時最大の勢力を誇つていた龍騎兵に解散止むなしの損害を与えたということになつていた。

当時一年生だつた今の三年生たちに問いただしても、薫と、一賀を怖れて詳しいことを教えようとはしないので、彼らが薫に何をしたのかは判らなかつた。

「本気になるんが何でそないに難しいんや」

パイで口を一杯にしたまま竜は呟いた。

「日栄さんと成瀬さんですか？」

緒方竜に図書館の視聴覚室に呼び出された相原裕紀と相原浩己は、あいはるひろのり ひろき

彼の質問にちよいと首を傾げて、

「成瀬さんでしょ」

と答えた。

「何でや？ 何でそう思つ？」

日栄一賀との方が付き合いの古い一人が意外な答えを返したので、竜は眉を顰めた。二人は成瀬薫が卒業してから入ってきた一年生だ。

中学が同じだった一賀のことはともかく、薫のことを何故そんなふうに評価できるのか。一年間付き合つた竜でさえ薫の実力については評価しかねているということ。

双子は、そつくりな顔を見合させて、

「一つにはあの日栄さんが大人しく連んでるから^{つる}」

と、彼らにしたらもつともな理由を挙げた。

「緒方さんだつてあの人気性は知ってるでしょ」

付け加えられたとおり、確かに元の日栄一賀なら薫のようなもめ事嫌いの日和見主義者など相手にもしないだろう。

「ふん、で？」

でも、一賀は機嫌良く薫と付き合つていた。何故か。

「で、もう一つには成瀬さん自身がそう思つてるから」

銀狐とあだ名される双子が日栄一賀より成瀬薫の方が上だと評価するもう一つの理由は、その評価と同様意外なものだつた。竜は、ぽかんと口を開けてポーズをとると、すぐ渋い顔に作り替えた。

「何…やと。ほないつ、口ではないことばつか言^いうつといで、腹ん中じゅ自分の方が上や思うとつたいうことかいな」

「まあ、そう言つても間違いじやありませんけど」

「でもたぶん、『本氣でやれば』、日栄さんの体調を抜きにしても成瀬さんの方が上手だと思いますよ」

浩己は「本氣でやれば」、というところに力を入れて言つた。

「ただあの人を本氣にさせるのはまず無理だと思いますけど」

裕紀が肩を竦めた。

それは竜が一番よく知つてゐる。どんなに挑発しても成瀬薫の態度は変わらない。竜と一賀の勝負を止めるために間に割つて入つて、竜を吹つ飛ばすほどの蹴りを喰らわせたときでさえ全く本氣ではなかつた。

だからこそ、成瀬薫の本氣が見てみたいのだ。

「日栄一賀と もう一戦やらかしたらどうや?」

後輩に、伺いを立てるように、ゆつくりと竜は訊いた。

「だめです。それは俺たちがさせません」

案の定二人はすぐに首を横に振った。

「緒方さんとじやあの人もが保たない。成瀬さんが来る前に俺たち

が止めますよ」

過去、唯一、日栄一賀を心停止にまで追い込んだという二人は、中学時代から日栄一賀に付き従つて、彼に仕掛けられた喧嘩を片つ端から片付けてきた。

「過保護やなあ」

竜は溜息をこぼした。

「緒方さんは何でそんなにこだわるんです」

一人にしてみれば、全くその気のない薫と、ようやく大人しくなつてくれた一賀の実力の優劣など、興味のない問題だった。

「俺はなあ、やつてもみんうちから結果を決めつけられるんが嫌なんや」

「でも」

と、言いかけてから浩己は口を閉ざした。

「でも何や」

しまつた、というような表情の浩己を竜が睨み付ける。

浩己は怒鳴られるのを覚悟で言葉を続けた。

「緒方さんだつてもう判つてるんでしょ、結果は」

「銀狐」

竜は浩己の胸ぐらを掴んで引き寄せた。

「人の頭ん中、覗くんやないで」

銀狐　　裕紀と浩己は精神感応力者テレパスだつた。言葉の形にして伝え合つことができる的是互いの思考のみだつたが、しかし、エンパシー共感と呼ばれるその力は人の心の動きを敏感に感じていた。

「緒方さん」

裕紀はやんわりと竜の腕を押された。

「あの人、ここに傷があるんですよ」

と、溜息混じりに自分の胸を指差して見せる。

竜は怪訝な顔で浩己を放してやつた。

「何や、心臓でも悪いんかいな」

日栄一賀が喘息持ちだというのは有名な話だが、成瀬薫の身体が悪いなんて言う話は聞いたこともない。

「そりじゃなくて」

と、双子はまた顔を見合わせた。

「俺たちじやあ詳しいことは解りませんけど、あの人、昔、何かあつたんでしょう？傷があるんですよ、ここにね」

もう一度とんとんと胸を叩く。

傷 精神的な、か。

鬱陶しいいやつちゃで、ほんま。成瀬薫も銀狐も。

「昔、何があつたんや？」

諦め半分に竜は訊いてみた。

二人は同じ様な仕草で首を竦めた。

「俺たちは知りませんよ。知つているとすれば、彩子さんくらいじゃないですか」

内藤彩子 か。

はああ、と、竜は溜息を吐き出した。

閉店間際に佐々克紀は現れた。

「こんばんは。成瀬先輩」

克紀は愛想良く笑つて力ウンター席に腰を下ろした。彼がここへ来る^{すぐな}ことは珍しくはない。お茶会同好会のメンバーではなかつたが、妹の少を連れてよく出入りしていた。

「よう、今日は一人か」

薫もいつものように愛想良く応対した。

克紀はくすりと笑つて、

「相変わらずですね。この間のことはお咎めなしですか」

と、視線をカウンターの上の自分の手首に落とした。

薫は自然とその視線を追つた。

克紀が袖口を少し引き上げると、銀色の細身の時計が姿を現す。

女物の

時計。

「咎め立てしたところでお前が聞くとも思えん」

「何事も、やつてみなけりや判らないでしょ」

克紀はゆっくりと腕を上げながら、視線を上げた。

薫の視線が腕の動きについて上がつてくる。

二人の視線が合う。

「 緒方先輩、また随分ストレスを溜め込んでましたよ」

克紀はにこっと笑つて頬杖をついた。

「お前……」

薫は克紀の笑顔から目が離せなくなつて「こ」とに気がついた。

「あいつにまた何か仕掛けたのか……」

佐々克紀が催眠暗示を使うことを知つていたはずなのに、まんまと引っかかった。竜はもつともつと単純だからなあ。薫は自由にならない身体を動かそうとすることはさつさと諦めた。

「あの人には仕掛けるまでもりませんよ」

克紀は言葉を区切つた。

「あなたが本気になるだけだ」

暗示、か。

薫は眉を顰めた。胸が痛む。しかし

軽い。

そそのが

「俺は筋金入りの腰抜けだからな。お前」ときに唆されたからつておいそれとは本気になつたりしないよ」

「その性格は直した方がいいんじゃないですか」

克紀は頬杖を外して腕をカウンターにおいた。

「ブラックを」

時計がこつりと音を立てる。 引っ搔いたくらいの暗示じゃあだめか。楽しませてはくれないなあ。

克紀は薫が彼の好みに合わせて淹れた濃いめのコーヒーに口を付

けた。

「緒方くん」

校門を出たといひで竜は呼び止められた。

「彩子はん」

いつからそこで待っていたのか、校門の脇で内藤彩子が立つていた。

わざわざ向こうから出向いて来るやなんて、どうこう風の吹き回しじゃ。

彩子はすうっと手を伸ばして人差し指で竜の眉間に押された。

「緒方くん、あたしたちを見るときにそやつて眉間に縦皺入れるのやめてくれないかしら」

「彩子はん…」

竜は彩子に押されて後ずさりすると額に手をやった。

眉間に皺て、俺、そないに気にして…。

「気に入らないんでしょ。薰ちゃんの日和見」

彩子は幼なじみらしく遠慮のない言い回しで薰を評した。

竜はちょっとと考えてから思い切って

「その上八方美人で優柔不斷ときどる」

と付け足した。

「よく解ってくれてるじゃない。なら、もう、勝負勝負つて追掛けるのは勘弁してもらえないかしら?」

彩子は竜に目配せして歩き始めた。学校に隣接する公園に向かつ。竜は彩子について公園に入つていった。

「薰ちゃんには全くやる気がないんだから、緒方くんの不戦勝よ竜はまた眉間に力を入れた。

薰の全くやる気がないっていうのは、弱い奴がしつぽを巻いて逃げ回つてこるとこつのとは違う。俺にしてみりや、相手にもさ

れへんかつたつちゅうひじかや。勘弁できるかいな。

「じゃあ」

と言つて彩子は振り返つた。

「緒方くんの不戦敗といつのはどう?」意地悪な問いかけだつた。

「嫌や。それだけは絶対にありえへん」

竜は即座に言い返した。

「俺は今まで負ける思て、喧嘩したことなんかあらへん。勝負なんてやつてみなわからへんやんか」

竜にはその言葉だけが頼りだつた。成瀬薫は恐らく自分より強い。心の奥底では判つていた。しかし、それを認めるわけにはいかなかつた。やつてみなければ判らない。薫の強さを見たこともないのに。

「彩子はん、あん人、俺より強いんか」

あまりに真つ直ぐな瞳を向ける竜に、

「今はそうね、まだ薫ちゃんの方が強いでしょうね。でも、あの人はもう鈍つていく一方だから、すぐに緒方くんの方が強くなるわ」と彩子は笑つて見せた。

「俺は、そんなん嫌や」

先のことなんかどうでもいい、今の、強い成瀬薫に勝てなくては意味がない。

「不戦敗は認められない?」

「当たり前や」

「じゃ」と言つて彩子は公園の中を先へと進んでいった。

「これで、認めてあげてもらえないかしり」

彩子が示したのは高さ一メートル以上はある庭園用の巨石だつた。

「薫ちゃんの高校三年間でたつた一度の本気の一発よ」

幅も厚みも一メートル以上はあるうかといつ巨大な石は縦にぱつくつと割れていた。中央部は石の表面が砕けて丸く凹んでいる。

「……んな、アホな」

竜はあんぐりと口を開けたまま立ちつくした。

モルタルの壁に大穴を開けたり、コンクリートブロックを割つた

「いろいろこのことは彼でもできる。しかし、相手は巨大な自然石だ。

それを。

「「じん……なん、ウソや。こんな……」

化け者もんか……、あいつ。

「緒方くん、構えなさい」

彩子は一言だけ声を掛けて、竜に打つて掛けた。

「なつ、彩子はんつ、俺は……」

女とはやれない そう言おうとしたが言えなかつた。

彩子の拳がとっさに構えた竜の腕をかいぐぐつて鳩尾に打ち込まれたからだ。重さは全くない。触れているだけだ。しかし、速い。

竜には彩子の躍るような動きが追えなかつた。

アホな。この俺が。

彩子の拳が身体に触れるのにそれを払うことがどうしてもできな
い。

竜が十発以上喰らつてから

「薰ちゃんはあたしの数倍速いわよ」

最後に彩子の拳は竜の顔面で寸止めされた。

「「じん……な」

竜はぎこつと歯を鳴らした。

内藤彩子がここまでできるなんて。

しかも。

「なんで、殴らへんのや」

手加減されていると考えただけでも竜は泣き出しそうだった。あれほどのスピードの打撃を全て寸止めするなんて。

「「じめんなれい。でも、あたしとしても、殴り返してこない相手を殴るわけにはいかないのよ」

彩子も竜が絶対に女を殴つたりしないことは承知していた。竜がその信条を通すというのなら、彼女にだって通したい信条はあった。それに。

目的のためには手段を選ばず。

いつだつたかそう決めたのよ。

「こんで、不戦敗を認めえつちゅうわけか」

竜は恨めしそうな声を上げた。

「そうよ」　たとえ可愛い後輩を傷付けることになつてもね。

何でや。

女に手加減されて負けを認めさせられるくらになら、薫に殴られて負けた方がいい。何故あの男は自分でやらない。竜は悔しくて仕方がなかつた。身体に傷を負うことは辛くはない、だが、こんなふうにプライドを傷付けられて黙つてはいられない。

「嫌や、俺、絶対」

「許さないわ、あたしが、絶対」

一人は暫く睨み合つた。

「何でなんや…」

先に折れたのは竜の方だった。眉を八の字にして彩子から視線を逸らす。

「「「めんなさいね。悪いのはあたしたちの方だつてこいつのは解つてるのよ。でも、普通の人は、一生殴り合いなんてしなくて暮らしていくわけじゃない？　あの人はやらないで済むことで痛い思いや苦しい思いをしたくないのよ」」

彩子は困ったように曖昧な笑みを浮かべた。

誰かてせんで済むならしどうはないわい。

「したら、一生そういうやなもんから逃げ回つとくつもりなんか」「できるものならね」

「痛つても苦しゅうても守らなければならぬものもあるのよ」「プライドを捨てても守らなければならぬものもあるのよ」

彩子の口調は静かだつた。竜を説得しようといつもいつな調子ではない。昔話を聞かせるように彩子は言つた。

「緒方くん、守りたいものがいっぱいあっても、実際守れるもの

は「よく僅かなの。薰ちゃんはね、自分の周りに波風を立てないことがなるべく多くのものを守れる方法だと思っているのよ。誰もが羅牙や美希ちゃんのように強いわけじゃないの、解るわね」

竜は彩子の言葉をきいつと噛み締めた。

プライドを捨てても守らなければならないもの。

そんな大事なものなら、痛い思いをしたって苦しい思いをしたつて、傷だらけになつてでも守らなければならぬのではないのか。

ただ逃げ回つたるだけで、何でそいつを守れるつちゅうんか。

「そんなん、解らへん」

竜は彩子の言葉の意味するところには思い至らなかつた。

「 緒方くん、裕紀くんと浩己くんを見てても解らない?」

彩子は心苦しそうに一人の名前を口にした。

「銀狐、か? 何で

一人は彩子たちが卒業してから入つてきた新入生だ。彩子があの二人のどんな事情を、そもそも何故、知つているというのか。

「あの子たちは優しいから、もし、羅牙や美希ちゃんや日栄くんがいなかつたら、もうここにはいないわ」

彩子は訳知り顔に言つて溜息を吐いた。

羅牙と美希。強さの喩え。

「そらどうゆう

言いかけて竜は漸く気が付いた。認めたくはないがあの二人くらいでないと安心できないってことなのか。

「あの子たちの方がきついとは思うけど、あの人も自分のことで周りの人間が傷付くのが怖いのよ。守りきれなくて辛い思いをするくらいなら誰とも関わらない方がいい。あの子たちもよ。日栄くんのことはどうしても放つておけなかつたみたいだけどね」

日栄一賀　　あいつでさえ守られる側やゆうんか。

何故それほど、強くなればならないのか。誰だってそんなに強くはあり得ないだろう。なのに何故、周りの人間の弱さにまで責任を持たなければならぬのか。

「　この辺りが不穏なのは今に始まつたことじやないのよ」

不穏。

「　あの人は自分の見ていないところで誰かが傷付けられるくらいなら、自分は強くなくていいと思ったの。強くなれば周りの人間まで傷付けられることはないってね」

「　何が、あつたんや」

そろまでしなければならない何が。

「昔の話はやめておくけど、龍騎兵にしても、ある人に言つことを聞かせるのにあの人自身には一切手を出さなかつたのよ。それがどれほどのストレスだつたか、解るでしょ」

それで、何もかもやめてしまつたというのか。逆らうことも、戦うことも。それで、鎧だらけの鈍になつて忘れられるのを待つているというのか。

竜は胸の辺りがいらいらして身を震わせた。

そんなのは嫌だ。それでは、卑怯な連中の卑怯な手に屈したことになる。そんな負け方は我慢できない。

「　だからあたしは強くなつたの。あの人守つて貰わなくてもいい程度にね」

「俺かて、そないな思いはさせへん。弱いやなんて思わせへん」

竜は拳を握り締めた。

「なら、早く強くなることね。あの人ほんとの鈍になる前に」

彩子は強い口調で言った。

「すぐや。すぐあいつより強くなつて見せたる。痛いとか苦しいとか言わせへん。羅牙にも美希はんにも俺の前には立たせへん。誰がどないに卑怯な手を使たかて、俺は逃げへんし、諦めへん。流れ弾がどつち向いて飛んでこうが俺が全部盾んなつたる、全部や。何があつたつてどないな田えにおつたつて、俺は絶対諦めたりせえへん」

身体の傷などもとより気にならない。卑怯な奴らがどんなに汚い手を使っても、守ることを諦めたりするものか。

彩子はにこりと笑つた。

「緒方くんは強いわね。その言葉、薰ひやんに聞かせてやりたいわ」

竜は彩子の笑顔から目を逸らした。

「嫌みなこと言いなや。今の俺ではあいつには勝てへんねやる」

彩子は笑つて竜の頭を軽く撫でた。

緒方竜の初めての不戦敗は、こうして決定したのだった。

(後書き)

成瀬薰 VS 緒方竜 あとがき

タイトルと中身が甚だしく違つてますね。でも、気持ち的にはこうなんだもん。竜ちゃん的にもね。

しかし、竜ちゃん、このシリーズでは一勝もできていなあ。あと残つてるお茶会メンバーは、銀狐と征四郎くんだけど、竜ちゃんが勝てるかどうかはやってみないと判らない（笑）。銀狐も戦うにされてはいるけど、組めばそれなりに強いからねえ。征四郎くんの方は作者にも全く判らない。だつて、彼の実力は真琴ちゃん（美希ちゃんの妹）の振り下ろした真剣を木刀で止めたつてことしか記されてないから。でもこの一人の対戦は、薰ちゃん VS 竜ちゃんよりあり得ないかも。お互いがお互いに興味がないんだもん。

ともかく、今回はとうとう竜ちゃん戦わずして負け。ページ数も大幅にオーバーして粘つたんだけど、相手が彩子さんじゃあね。竜ちゃんも聞き入れるしかないよね。克紀もちょいと暗躍（笑）してるけど、薰ちゃんを本気にさせるには至らなかつたねえ。全く楽しませてはくれない。でも、この後にこの辺りはどんどん不穏になつてしまつて薰ちゃんも手を挙げてはいらなくなつてしまつます。自分のせいじゃないことで周りの人間が傷付けられてしまうから。某組織の性悪エージェントも本腰入れて学園物に入していくし。

がんばれつ、薰ちゃん。鈍^{なま}つてる場合じやないぞつ。

そして、がんばれ私、番外編ばかり書いてる場合じやないぞつ。

番外編だけでイメージ固められたらお茶会の人間も動きづらくなつちやうぞ。というわけで、本編の方、もっと頑張ります。ぢや、みなさんまた会いましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4966y/>

『喧嘩百景』第6話「成瀬薰VS緒方竜」

2011年11月17日19時41分発行